

世界の一流選手が愛用する老舗柔道衣メーカー 東京五輪に向けた新たな挑戦

早川繊維工業 株式会社

2年後に創業100周年を迎える老舗武道衣メーカー、「早川繊維工業 株式会社」。特に『九櫻（くさくら）』のブランド名で知られる柔道衣は、世界の一流選手に愛用され続けています。大阪府柏原市の本社兼縫製工場では、世界で唯一、柔道衣を生地の織りから縫製まで自社で一貫して生産しています。世界で11社しかないIJF（国際柔道連盟）の認定を受け、製品への高い評価と信頼を得ている同社。今回は代表取締役社長の三浦正彦氏より、2020年の東京五輪・パラリンピック開催をにらんだ、氏の熱い思いを伺いました。



1918（大正7）年創業 — 大阪が誇る老舗武道衣メーカー

大阪府八尾市を中心とした河内平野は、かつて全国有数の綿作地帯で、その綿から作られる河内木綿の一大産地でした。八尾の恩智出身である私の祖父は、河内木綿を紺に染めて販売する商店を営んでおり、武道具店などに売り歩いていた。その時、河内木綿を使って、自分で剣道衣や剣道袴を縫って売ればよいのではないかと思いつき、ミシンを買って始めたのが創業のきっかけです。このように創業当初は、八尾市で剣道衣をメインにスタートしましたが、現在の主力製品である柔道衣も、独特の刺し子織を用いて、一緒に作っていました。

1939（昭和14）年4月には、早川武道具(株)として会社組織にし、織機を3

台取り入れました。しかし、日本が第2次世界大戦（太平洋戦争）に敗戦したことにより、武道具を作ることを一切禁止されてしまったので、もんぺなど木綿を使って作れる衣料品を縫製して売っていたそうです。

戦後、武道具の生産の許可がおりた1947（昭和22）年に、現在の早川繊維工業(株)へ社名を変更し、柔道のほかに剣道、居合道、なぎなた、弓道などの色々な道衣の生産を展開しました。昭和30年代に入ると本社を八尾から柏原に移し、本社兼工場として現在に至ります。

日本の象徴“桜” — 世界の『九櫻』ブランド誕生



当社のメインブランドである『九櫻（くさくら）』のマークは、昭和14年の株式会社創立と同時に誕生しました。このマークは、初代社長の出生地、八尾の恩智に由来するものです。

話は、14世紀中頃の南北朝時代にまでさかのぼります。後醍醐天皇の側近として活躍した楠木正成の家臣に、恩智左近という武将がいました。その武将が恩智城を築き、掲げていた紋所が



新 IJF 規格認定柔道衣
左：IJF 主要国際大会、全柔連主催指定大会使用可
右：IJF 主催国際大会用

早川繊維工業 株式会社

代表取締役社長：三浦 正彦
創業：1918年（大正7年）5月1日
本社：柏原市上市3丁目11-21
従業員数：69名
事業内容：柔道衣・剣道衣などの武道具の製造

◆ アスリートを支える 技ありの心遣い 五輪で使える国際柔道連盟公認の畳

五輪で使用できる畳は、IJF（国際柔道連盟）公認のものに限られる。日本国内でIJFの公認を受けているのは当社のみ。特徴は、イグサを使わず、ポリプロピレンなどの素材を塩化ビニールで覆ったもの。海外製は単層なのに対し、9層もの多層構造になっている。そのため体が強くたたきつけられても吸収がよく、痛さが和らぐ。また、海外製は足が滑りやすく、これまでも選手を悩ませてきた。しかし当社の畳は、滑りすぎずひっかりすぎないと選手からの評判も高い。



IJF（国際柔道連盟）「公認畳」



グランドスラム東京会場（2014、2015）

桜のマークであったことが由来です。

九櫻ブランドとして成立したのは平成3年のことです。ローマ字で書くと普通は“KUZAKURA”というように“Z”になりますが、当社では“S”を用いて“KUSAKURA”としています。



この“S”は日本の国花である桜の頭文字を取っており、形は柔道の帯をイメージしています。

2012年のロンドン五輪開催時は、海外の選手に当社の柔道衣をアピールし、多くの選手に着ていただきました。主な国として、ロシア、中国、モンゴル、ベルギーなどの選手に着ていただき、当社の柔道衣の着用率は世界で3番目でした。本格的に“S”ブランドが世界に広がり始めたのは、それからです。もちろん、今年の8月から開催されるリオ五輪でも20数カ国より柔道衣の注文を受けています。本当に限られた短い時間で作りました。機械で量産するのではなく、人の手で一着一着を作り上げていくので、時間が非

常にかかります。選手1人につき青と白の2着を用意しますが、寸法もそれぞれの選手に合わせ、服装規定もきちり守らなければならないので、本当に大変な作業でした。リオ五輪に向けて、当社の道衣を着た選手が、どれだけたくさんメダルを取ってくれるかがとても楽しみです。

生地から縫製までの一貫生産— 自社の強みを活かして

IJF（国際柔道連盟）に認定されている柔道衣メーカーは、世界で合計11社しかありません。世界大会の試合では、このIJFに加盟したメーカーの柔道衣しか着用できません。日本では当社を含めて2社、ヨーロッパに9社あります。その中でも当社だけが自社工場に織機を持っており、生地を織りあげ、裁断・縫製までの一貫した生産を行っています。生地は独自の織り方で、肌触りの良さにもこだわっています。強度に関してはIJFの規定があるので、他社と差をつけるには着心地の部分が必要なポイントになります。国内外から高い評価をいただいている理由は、その着心地の良さが評価されているからだと思います。実際に着用しているユーザーの声を反映させ、細かい部分にまでこだわって作ることができるのは、一貫生産をしている当社の大きな強みです。



高級柔道衣の「盡己（じんき）」
昨年から新たに販売された。柔道を極めた人達に着てもらった製品で、より手刺し風に近い柔道衣。かなりの手間をかけて作られている。

リオ五輪開催を前に、IJFは2015（平成27）年4月に新ルールを施行しました。新ルールの一つとして、柔道衣に使われる生地について制限がかけられるようになりました。従来通りの引っ張り強度は保ちつつ、生地を薄くして軽量化を図るといふかなり厳しい内容の要求でした。その難題を自社で生地を織れる工場があるという強みを活かし、研究と試験を繰り返し行うことで、世界で1番早く服装規定をクリアした柔道衣を作りあげることができました。検査機関のチェックに合格した当社の柔道衣はひと足早く、東京で開催された世界大会で選手に着ていただくことができました。これらの実績が、私たちのものづくりに対する自信につながっているのだと思います。

◆ 柔道衣づくりのポイントは、生地と縫製にあり 厳しい品質チェックをクリアし、選手のもとへ

柔道衣の生地は一般の衣料品の生地よりも厚く、縫製の際の細かい作業が難しい。生地を1mm単位で綺麗に縫い合わせるのは、至難の業だ。全日本柔道連盟や国際柔道連盟の服装規定で、袖や裾の長さなどが細かく決まっているうえ、綿の生地は洗うと縮んでしまう。洗ってちょうどよい寸法になるように、“縮み”を考慮した寸法で作らなければならない。着用した選手が服装規定に合わず試合に出られないことになると大変な問題になるので、仕上がり寸法はきっちりと管理している。



拡大する生産体制―

2020年の東京五輪に向けて

国内だけではなく、海外でも生産を行っています。高級柔道衣や公式試合の選手が着用する柔道衣は日本国内で、学校用の柔道衣は海外で作っています。もちろん海外で作ったものもすべて、国内の当社の検査部できっちりと検品し、品質管理を徹底させています。

2020年の東京五輪開催決定を機に、生産体制をさらに拡大させるべく、中国やベトナムといった外国人の雇用も本社工場で積極的に行っています。外国人雇用につきましては、毎年定期的に、私が現地に行って面接を実施しています。即戦力となる人材を雇用するために縫製テストなど、業務に直結した試験を行って採用しています。

社員増員に伴い、今ある縫製工場だけでは手狭になるので、新たに第2工場を建設し9月には完成する予定です。また、今年の6月には子会社である早川縫製工業(株)を立ち上げ、外国人の採用枠も新たに増やすことができ、順調に人員を拡大し続けています。やはり企業は新しい人材を入れなければ活性化しません。



世界一のブランドを目指す―

100年企業の新たな挑戦

2020年の4年後に控えた東京五輪・パラリンピックまでは、需要はどんどん増えていくと思います。しかし、五輪が終わるとその後はどうなるのか、不安な気持ちがあります。ですので、それまでに当社の“S”ブランドが世界一を目指すという大きな目標を掲げています。7月に行った全社会議でも、今後の展望として「4年後の東京五輪を見据えて、今から新しい分野を精力的に開拓していこう」という話をしました。柔道の世界に留まらず、時代が求めるニーズをつかみ、新たな分野にも目を向けていこうと考えています。

私は平成9年から20年近く社長をやっています。2年後に当社は100周年を迎えますが、その大きな節目を自分自身で迎えるのだなど、日々実感しながら仕事に取り組んでいます。大正時代から続く老舗企業として、次は200年を目指して、多くの方に愛用していただける製品を今後も作り続けていきたいと思っています。



同社の商品カタログ「武道」

柔道、空手・剣道・居合道・なぎなた道・合気道・弓道などの道衣をはじめ様々な用品・道具を掲載している。